

私は私を許さない

如月 刹那

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アナスタシア・ニコラエヴナ・ロマノヴァ

異聞帯の彼女によつて、カルデアは壊滅を迎ることになつた

当然ながら、カルデアとアナスタシアはここで初対面で、第一異聞帯で雌雄を決する
ことになる

だが、もしカルデア側が既に汎人類史側のアナスタシアの召喚に成功していたら？藤
丸立香の最初のサーヴァントならば？

そんな可能性を秘めたIFの世界線

「私はもう何も失いたくないの…………」

「俺は????の正??の???になるよ」

?????

息抜きに書いた短編です。多分すぐ終わります。あと、かなりのF a t e 及び型月に
わかなので、独自解釈など色々と酷いです。それらが苦手な人はブラウザバツク推奨で
す。

私は私を許さない：序
私は私を許さない：壊
私は私を許さない：迷

目

次

24 13 1

私は私を許さない：序

アナスタシア・ニコラエヴァ・ロマノヴァ

2017年12月31日——異聞帯サーサーヴァントである彼女に攻められて、カルデアは崩壊した。これが人理を救つたマスターとその仲間達を襲つた現実だ。

しかし、数多ある何処かの世界線では査問が引き延ばしにされ、様々な厄介事を引き起こす者がいれど、割と平和な日常を送れたカルデアもあつた。
ならばこれも運命か。

これは、大切なものを奪われた皇女こうじょと大切なものを奪つた皇女の鬭こうていいである。

彼との出会いは、普通の聖杯戦争ではなかつた。私が召喚されたのは、辺りが炎に包まれ、廃墟と化した街。目の前にいたのは、まるで未熟な魔術師。闘いとは無縁そうな、平凡な男だった。それでも彼はその身を震わせながら、私にこう言つた。

「力を貸してくれ」と。

彼は率直に言えばドバ付くお人好しだった。サーヴァントである、私をただの人の様に接して。だからこそ恐れた。もう一度、大切なものを失うことを。

「近付かないでください」

彼はそれでも私に接してきた。それと同じ様に彼の後輩（？）である、マシュー・キリエライトも話しかけてきた。まあ最初に召喚されたサーヴァントは私ですし、あまり仲が悪そうに見えて、他のサーヴァント達への影響がありそうですしね。そこへの配慮はしましよう。

「まあ……壁越しに喋るくらいなら、構いませんが……」

彼は楽しそうに笑う。それがどんな虚勢であろうとも、周りを安心させるために。大切な後輩を守るために。仲間達と未来を見るために。弱音を吐かず、人類史を歩み続ける。……少しはサーヴァントとしての役目を果たした方がよろしいでしよう。

「まあ……同じ部屋に居るくらいなら、良いです……」

彼は至つて、普通の人だ。魔術礼装がなければマトモな魔術も使えず、それでも世界を救う為に頑張っている。けれど、普通だからこそ……責任や重荷は彼を縛り付ける。私がそれを支えてあげたい。

「あらマスター、いらっしゃい。ちょっと待つてね。今、お茶を淹れるから。皇女といつ

ても、末期は自分独りで色々とやれるようになつていたのよ」

彼は――平凡で、お人好しで、普通で。私にとつて最高のマスター。いつの間にかに、私の心の氷は溶かされていた。マスターも、周りの人達も、お姉様方達の様に大切な存在になつていた。ならば、私は――。

「掴んだ手を、離さないで……。私の目の届く所に居て。私の声を聞いたら、いつでも返事をして。私はもう……失いたくないの」

――この命尽きる時まで、貴方をお守りします。

素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せ

よ。
閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

――告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。

誓いを此処に。

我是常世總ての善と成る者、

我是常世總ての惡を敷く者。

汝三大の言靈を纏う七天、

抑止の輪より來たれ、天秤の守り手よ――！

「サーヴァント、アナスタシア。召喚の求めに応じ、ここに参上したわ。久しぶりね！ 再び、貴方を守り続けるわ！」

クリスマスが終わりを告げ、マスターとのお別れを果たし、名残惜しいもののカルデアから退去をした私。こうして再び召喚されたことを嬉しく思いながらも、先程から嫌な予感がしてならない。

——地獄すら生温い現実が、すぐそこに迫つていた。

俺の名前は藤丸立香。様々な経緯があつて、人理修復をすることができる最後のマス

ターになってしまった。ドクターやダヴィンチちゃんはすごく申し訳なさそうにしていたが、俺は後悔はしていない。確かに人理修復するのに、色々な傷を負い、死を目の当たりにし、大切な人も失つた。それでも色褪せない、濃い2年間だったと思う。

自分を慕つてくれる後輩(マシュー)、司令官代理や技術顧問など影から支えてくれた万能の天才(ダヴィンチちゃん)、1番最初に召喚に応じてくれた彼女(アナスタシア)に、数多の英靈(なかま)、カルデアのスタッフ達、皆のお陰で未来を掴めた。

特にアナスタシアにはお世話になつた。最初はかなり拒絶的な態度を取られたものの、特異点を駆け抜け、時間を過ごすと共にかけがえのない存在となつた。自分が挫けそうな時も、ずっと支えてくれた優しい皇女。

お転婆(ナースチャ)で、ちよつとワガママで。

そんな彼女(ナースチャ)のことが好きだつた。

結局、本人には言えなかつたけどね。マシューと言い、2人して積極的に迫つてきただら、比較的平和な時はかなり心臓に（別の意味で）悪かつた気がする。

退去前に告白しようとも思つたが、自分は人間で彼女はサーヴァント。彼女を俺で縛り付けていけない。また会おうと約束してお別れをした。

——だからこそ、あの光景は忘れることができない。

シャドウボーダー内で、備蓄に余っていたなげなしの聖晶石で召喚できるかを、ゴルドルフ新所長の判断を元に実行した。召喚は成功した。

「あら？ 随分と殺風景な場所ね。カルデアではないのかしら？ とりあえず、マスターにお茶でもご馳走してあげたいのだけれど

ブンブンと効果音が聞こえそうな可愛らしい仕草で、アナスタシアはそう告げた。彼女は悪くない。あのアナスタシアとは別人だ。そう皆は頭では思っているが、実際は警戒している。立香自身も今、どんな目でアナスタシアを見つめているか分からない。

「……なにかしら、この空気。随分と張り詰めているみたいだけど、どうかしたかしら？」

そう問い合わせるが、誰も答えない。否、答えることができないのだ。彼女に言つてしまえば、きっと彼女は耐えられない。ここで黙つているのは決していい結果にはならないが、最悪の結果になることもない。だからあのホームズも、黙りを決め込んでいる。だが、その均衡を破つたのは良くも悪くも、ゴルドルフ新所長だつた。

「な、なぜ貴様がここにいる！」

青い顔をして、新所長が驚いていた。無理もないだろう。ゴルドルフ新所長はあと数秒遅れていたら、この少女と同じ人物に水漬けにされていた。

実際、俺とマシューが助けに行かなければ……。

「新しいカルデアのスタッフかしら？私の名前はアナスタシア。アナスタシア・ニコラエヴァ・ロマノヴァ。ロマノフの皇女よ。よろしくね」

そう言つて、アナスタシアはゴルドルフ新所長に微笑みかけるが、新所長は青い顔から一転、顔に怒りを浮かべていた。そして怒りのままに、崩壊の言葉を放とうとした。

「なぜ貴様がここにいるかと聞いている！貴様は……！「ダメです！ゴルドルフ新所長！」カルデアを崩壊させたサーヴアントだろう！！」

その言霊が放たれて、一瞬で空気が凍り付くのが分かつた。アナスタシアは、言葉の意味が理解できていなかつた。

「私が……カルデアを崩壊させた……？」

「そうだろう！私だつて間一髪だつた！殆どのカルデアのスタッフを殺し尽くして、カルデアを凍結させた！」

「それ以上はダメです!!アナスタシアさんが!!」

マシューが止めに入るが、時既に遅し。アナスタシアは信じられないという顔をしてい る。周りに眼を回す。スタッフ達の目は大小あれど、警戒、畏怖の眼を向けている。

次に救いを求め、縋り付いてきたのはマスターである、俺だつた。

「ねえ……嘘でしょマスター？私がカルデアを……大切な皆を手にかけただなんて

。嘘だと言つて立香 マスター

立香は目を逸らしてしまった。本来ならそこでアナ斯塔シアの言葉を受け止めて、答えてあげるべきなのに。それを解と受け取り、アナ斯塔シアは顔を絶望に染めていく。「あああ……。わ……たくしは……みんなを……たいせつなひとたちを……」

身体も声もガタガタと震わせていく。流石にその様子にゴルドルフ新所長も、あのアナスタシアと別人と認識したようだ。スタッフも我に返り、立香も声をかけようと/or>が——。

一
あ

「……っ！俺っ！行つてきます！」

「ちよつ……待ちたまえ！……彼女は本当にあの時のやつとは別人なのか？」

ゴルドルフ新所長は沈痛な雰囲気を漂わせながら、ダヴィンチに問うた。その答えはすぐに帰ってきた。

「……勿論だとも。彼女は人理修復を始めた時からの仲間でね。最初はツンツンした態

度だつたが、そのうちスタッフ達のカウンセリング相手などで随分助けられたよ。皆を家族のように接してくれたのさ」

「私は何も知らずに、彼女に酷いことを言つてしまつたのだな……。後で謝らなければ……」

「ええ。ですが、今はM r. 立香に任せましょう」

追いかけた先は期せずも、自分のマイルームだつた。一瞬、入ることを躊躇つたが……。

とりあえずノックだけして、入る意思を表明した。

「入るよ、ナースチャ」

部屋の中に入つたが、真つ暗だつた。当然ながら、シャドウボーダー内の電力は有限だ。自分がいない時に、電気を付けるなど以ての外である。

目を凝らした先……ベッドの上にアナスタシアが佇んでいた。そのままアナスタシアの元に向かおうとしたら、不意にアナスタシアが呟いた。

「私の」

「ナ」「私の手を掴まないで」 つ!!」

「私の目の届くとこから離れて」

「私の声を聞いても返事をしないで」

「私はもう」

「気圧されて、そのまま壁にもたれかかり、部屋の電気がつく。
「何も失いたくないの…………」

目から光が消え失せ、壊れたように微笑み、涙を流している姿が照らされる。心が壊
れた姿が、映し出される。その姿に何時かのアナスタシアはなかつた。

俺は、勢いのままナースチャを抱きしめる。

「ごめんっ…………！」ナースチャが1番辛いのに…………俺は目を背けてしまつた！俺が1番
支えないといけないのに！ずっと支えてくれたナースチャのマスターなのに！」

「私に近付かないで…………」

ナースチャは身体を震わせながら、そう呟くだけだつた。自分の不甲斐なさに反吐が
出る。何が人理を救つたマスターだ。好きな女の子1人守れない。

「…………ナースチャ。俺はもう君のマスターである資格がない。ただ1つだけ言わせて欲
しい」

虚ろな目をしながらナースチャはこちらを向く。その目に……どこかにナースチャ
の意思があると信じて。

いつか工ミヤが話してくれたことが、少しだけ分かつたかも知れない。きっと根本が違うのだけれど。

「俺は君のことが好きだ。君のことが大切だ。俺はもう君を裏切らない。俺はナースチヤだけの【正義の味方】になるよ」

——いつしか、どこかの正義の味方が、大切な後輩に言つた言葉。彼は、その呪いの言葉を受け継ぎ、1つの結末に辿り着いた。きっと1つの幸せの形に辿り着けたのかかもしれない。

——けれど?????と藤丸立香は違う。?????は呪いの言葉で正義へと妄信したが、藤丸立香は普通の一般人だ。人理修復を成し遂げたとは言え、その心の在り方は変わらない。ただの平凡な人間だ。

……その先は地獄だぞ、マスター。君は……俺のようにはならないでくれ……！

そんな声が何処かで木霊する。しかし、藤丸立香にその声は届かない。

ナースチヤは安心したかのように、俺に抱きついてきた。そのまま身を委ね、睡魔に誘われる。

「もう俺は離さない……。ナースチヤを支え続けるよ」
て始めた。

「サーヴァントは寝ることはないが、精神的に疲れたのか、そのまま安らかな寝息をた

シャドウボーダー内の一室は再び、暗く、闇に沈んでいった。
壊れ始めた歯車は、もう戻らない。

私は私を許さない：壊

ここにちは。マシユ・キリエライトです。今回はアナスタシアさんが、召喚されてからのお話を少しさせていただきます。

あの後、数分もすれば、先輩は戻つてきました。どうやらアナスタシアさんは、先輩の部屋で寝ているそうです。羨ましい……いえ、なんでもないです。

その時に、先輩とお話をしたのですが……。

私の中で違和感……認識の齟齬がある気がしました。

でも、あの状態のアナスタシアさんを、落ち着けることが出来たと聞いたので、安心したのもあつて、特に気にすることはしませんでした。

——今、思えば、私はずっと旅をしてきたサーヴァントとしても、サポートとしても未熟だと。先輩とアナスタシアさんが、あんなことになるなんて、私には思いもよら

なかつたのです。

カルデア崩壊から1週間、アナスタシア召喚から4日が過ぎた。あれからのアナスタシアは、前のようにスタッフ達のカウンセリングなどを行い、周りとコミュニケーションを取っていた。

ゴルドルフ新所長とも仲直りし、改めて自己紹介した末で、今も会話などを交わしているようだ。

周りから見れば、前と同じように振舞えているだろう。ただし立香からの視点では、全くの別物だ。

瞳の奥が淀んでいる。感覚でしか感じられないものだが、前とは明らかに違っている。何を考えているかは、想像に難くないが、自分としては、アナスタシアの意思を尊重したい。

俺自身も、もう2度と彼女を離さないと決めた。ずっと支える為に。クリプターを倒し、アナスタシアを守り抜き、生き続ける。

そう

何を犠牲にしようとも

俺はナースチャヤだけの【正義の味方】だから

——藤丸立香は生きる理由呪いを抱え、壊れていく。

あれからマスターの様子がおかしいように、アナスタシアは感じた。ずっと過ごしてきた自分にだからこそ、分かつたのだろうか。十中八九、自分が召喚された時の出来事が原因だと思われる。

だから、アナスタシアは前よりも立香の近くにいるように心掛けた。その行動の甲斐あつてか、自身のマスターの変化を理解してしまった。

私の所為だ。立香はもう普通ではない。私が業を背負わせてしまつた。きっと立香は、前の立香に戻らない。戻れない。

でも、私はそれを嬉しく思うわ。立香が私を一番に想つてくれていてるもの。私の中で、一番大切な存在が。恐らく、これから私が起こす行動も見守つて、見捨てないでいてくれるだろう。

だから私は

あらゆる敵を凍り殺し

邪魔する者を斬り殺し

遍く邪悪を呪い殺す

殺して殺して殺して殺して

奴らの大切なものを全て奪い殺す

こんな私を愛してくれるマスターを失わない為にも

願わくば、立香に幸あらんことを

——皇女は復讐の炎を灯し、マスターの安寧を祈る。

「…………喜べ少年少女。君達の願いは漸く叶う」

「何か言つたか？」

「ただの独り言だ。気にならないでくれたまえ」

異聞帯のロシア領にて、ここまたイレギュラーな存在が愉悦にほくそ笑み、胸を躍らせた。

「いくぞ。キヤスター」

「ええ。全てを凍てつかしましよう」

教会前にて、クリプターとサーヴァント率いる立香は対峙した。通信でも、マシユ達がこちらの様子を見ている。

『アナスタシア……さん』

マシユが呟いた。あちらにアナスタシアがいることに、やはり思うところがあるのだろう。しかし、何も問題はない。ここまで來るのに随分と犠牲も出した。今更、特に言うこともない。

——全てはこの時のために。

「皇帝^{ツアーリ}の威光に平伏せよ。我が名はアナスタシア」

「君のサーヴァントと、こちらのサーヴァント。どちらが強いか、改めて勝負だ」

ああ。勝負だ。

俺のサーヴァントの存在に、気付けない時点でそちらの負けだ。

「惨たらしく、凍え死になさい」

突如、カドックとアナスタシアの背後から、凄まじい魔力が現出し、氷塊が放たれる。それに反応出来なかつた、カドックが吹き飛ばされた。

「ガハッ……!?」

「カドック!?」

すぐさまあちらのアナスタシアは、カドックに駆け寄つたが、自身のサーヴァントの憎悪は全然晴らされないようだ。隙を与えず、アナスタシアは、立香に令呪を使うように促す。

「立香」

「令呪を持つて命ずる。ナースチャ。宝具を展開し、全力で奴等を殺せ」

『先輩!? 何を言つているんですか! やめてください!!』

通信からマシュの制止の声が、聞こえて来るが関係ない。周りにいる、アヴィケブロンやビリーも咄嗟のこととで、驚愕に染まつてゐる。

アナスタシアには、このロシア領の探索中、ずっと靈体化してもらつていた。原住民

を混乱させないための配慮だ。

こちらの令呪は1日で1画回復するが、簡易な命令しか使えない。だが、相手に悟られないレベルに魔力を薄めることぐらいなら、この令呪とアナスタシアの協力で、なんとか実現できる。

さあ。ナースチヤ。君の思うがままに。その憎悪で相手を凍てつかせろ。

「ヴィイ、奴等の全てを見抜き、呪い殺しなさい。何度も、呪いなさい。大切な者を奪われた、この憎悪は決して晴れることはない。ならば、あらゆるもの奪い殺せ！殺し尽くせ！魔眼起動！」

アナスタシアの背後にヴィイが現れ、怒りのままにカドツクとアナスタシアに、その鉄槌を何度も振り下ろし、魔眼で辺り一帯を凍土へと変える。

復讐者の如く、復讐心を燃え上がらせ、不気味に顔に笑みを浮かべながら、カドツクとアナスタシアに殺意の言霊を放つ。

「殺せ。殺せ。殺せ。私の心を晴らすために、愛しい立香^{マスター}を守るために。害為すもの全てが、壊れて千切れて割れてしまえ！疾走・精霊眼球！」

あちらは何とか耐えているようだが、苦悶の表情でこちらを睨みつけてきている。カドツクに攻撃されたことを怒っているのだろうか。ならば、因果応報だ。

奴等はアナスタシアを、悲しませた。心を壊した。俺が出来るのは、それを支えるこ

とだけ。

結論から言えば、逃げられた。カドツクがなんとか令呪を使い、撤退をされてしまつた。こちらからしたら、不完全燃焼でしかない。

周りに冷気を立ち込めさせながら、自身のマスターに宣言した。

「ねえ、立香。今度は必ず殺すわ」

「……うん。ナースチャ。俺はナースチャがやりたいように、出来るよう、頑張るよ」

きつと、前までならこんな私を諭してくれた。でも、もう後戻りはできない。私も立香も壊れている。マシユや他のサーヴァント達は、黙つて見ているが、内心よく思つてないことは、簡単に分かる。

ごめんなさい、マシユ。もう私達はお互に依存しなければ、生きていけないでしょう。貴方の大切な先輩をこうしてしまったことを考えれば、クリプターの連中と変わりないのかもせません。

だから全て終わつたその時は――。

「こんな状況になつてしまふとは……予想外だ」

「本当にそう思つているのかい？ ホームズ」

「勿論だとも。こうなりうる可能性は考えていたが、私も過信してたのだろうね。彼ならば……と」

「それは些か無責任だと思うけどね。そんな予想がついていたなら、私はもつと2人を……」

「それは無理と言える。彼はアナ斯塔シア嬢と親身であることは、誰の目を見ても明らかだつた。その2人自身が乗り切ることができなかつた。他の誰が何と言おうと、納得はしないだろう」

「むう……。とりあえず、クリプターを殺すのは賛成できない。彼らからは情報も得られるし、何より殺してしまつたら、本当に立香君は戻つてこれなくなつてしまふ」

「もう、手遅れかもしれないがね」

「そんなことを言わないのでほしいなあ。私は何であろうと、2人を止めてみせる。彼らの為にも、マシユのためにもね。……勿論、彼等を守る為に消えた、ロマンだつてそんなこと望んじやいないはずだしね」

「私も努力はしよう」

壊れた歯車は動き続ける。
壊れ続けて無くなるまで。
誰かが止めるまで。

決して、止まらない。

23 私は私を許さない：壊

私は私を許さない：迷

「はあ……」

カドック・ゼムルプスは溜息を吐いた。考へてゐることは、勿論奴の……藤丸立香のサーヴァントについてだ。

奴のサーヴァントは、奇しくも自分のサーヴァントと同じアナスタシアだつた。いつ召喚したのか、それが分からぬ。この異聞帯に来てから召喚したのだろうか。

いや、それはない。少なくもあいつらの間には、確かな信頼関係が見えた。少ない言葉だけで、相手の意思を汲み取り、こちらを明確に攻撃して來た。それに……。「なぜ、あそこまで怒つていたんだ……。あつちのアナスタシアは、カルデアにいた時期が長いのか？」

奴のアナスタシアは不意打ちでカドックを狙つて、殺意を剥き出しにして、宝具でこちらを圧倒してきた。あの殺意は尋常じやないレベルだつた。

「……ツク、……ドック、……カドック。ねえ、聞いてるのかしら？ 私のマスター？」
「……っ！ いつの間に、横に来ていたんだ」

「あら？ 私に気付かないなんて、凍らせたくなるわよ。それで、何を考えているのかしら？」

「ああ、やつのサーヴァントについてだ」

アナ斯塔シアは、そのことを聞いた瞬間に嫌そうな顔をした。あれだけ、自分に……汎人類史の自身に、追い詰められたのをよく思つてないようだ。

「それについてなら、マカリーコ司祭が調べてくれたみたいよ」

「勿論だとも。今から説明しよう」

アナ斯塔シアに続いて、マカリーコ司祭もいつの間にかに立っていた。アナ斯塔シアはともかく、こいつは、いつ来たんだ。

「まず、カルデア側のアナ斯塔シアについてだが……あちらの皇女はどうやら、藤丸立香が最初に召喚したサーヴァントのようだ。仲もかなり良好。ここまで言えば、分かると思ふがね」

「カルデアの連中を殺したからか？」

「それだけではないでしょ。元の私なら、そこまで長く過ごしていれば、家族の様な信頼性を築けていたと思うわ。きっと、家族を失うのは辛いですもの」

今でこそ、ヤガの精神性などが埋め込まれ、家族の顔さえ思い出せないほど変質しているアナ斯塔シアだが、アナ斯塔シア自身が言うんだ。あちらのアナ斯塔シアは、そう

言う存在だと考えたほうがいい。

「それに加えて中身こそ違うものの、同じ存在に殺されたのだからね。靈基が変質しかけているのも頷ける」

「靈基が変質だと？そんなことがあり得るのか？」

「ふむ、ないとは言いきれない。私にとつては馴染みのある靈基だつたのでね。――あの泥と良く性質が似ているよ。最もアレは災厄を齎らすものだから、比較対象としては弱いがね」

「マカリ―。アンタは何を言つているんだ」

「いや、こちらの話だ。気にしないで、忘れてくれていいい」

馴染みのある靈基？泥？聞き覚えのないことだが、今はそんなこと気にしている場合ではない。とにかく、あちらの戦力にこちらの想定外のものが加わった。それを考えて動かなければならぬ。

アナスタシアを必ず、皇帝ツアーリにするために。

「ふふ。可愛い寝顔」

アナスタシアは寝ている立香に膝枕をして、頭を撫でながら呟いた。その後、こちら側のサーヴァントに説明などしたり、叛逆軍等が壊滅したりしたが、全て些細なことだ。自分の中で、そう考えるものの立香に無茶な重荷を背負わせていないかと改めて思った。

自身のマスターは優しい人だ。だからこそ、今回のことでのみだけの味方になつてくれると言つてくれたが、普通なら死にゆく人を見捨てるのできない人でもある。

きつと他の人をいくら犠牲にしようと、敵であるクリプターを殺すことになつても、立香は復讐鬼となつた私についてしてくれる。けれども心の奥底では、立香は罪悪感で縛り付けられる。

罪のない人を犠牲にすること、壊れていく私を止められないこと。その全てがのしかかる。立香も共に壊れていく。寄り添つてくれることに嬉しいと思う反面、私のせいで摩耗していく姿を見ていられなくなる。

クリプターを逃した時に、次は必ず殺すと私は言つた。立香は私がしたいように頑張ると言つてくれた。でも、私の言葉に返答するのに間があつた。アナスタシアはこれ以上、立香と一緒にいていいのかと迷いが生まれてしまう。

「2人共、部屋にいたのね、立香君はお休み中かい。まあ、もうすぐクリプターとの決戦だしね。休める時に休まないと」

部屋のドアが開いて、武蔵が入つて來た。彼女とはカルデアでも付き合いがあつた。まあ、ほぼカルデアに留まつてることはなく、外に出ていたが。

「私達2人の空間を邪魔されたくないのだけれど? 無粋なのでは、武蔵?」

「うんうん、マシユちゃんとの話は終わつたからねー。次はこつちかなーつて。大丈夫? アナスタシアちゃん、無理してはるでしょ」

「……そういうところは鋭いのね。恋愛に関する事は疎いのに」

「そ、それは関係ないのです! とりあえず、私が相談に乗つちやうよー」

「なら、お言葉に甘えるとします」

私は立香に聞いたこと、別の自分がカルデア崩壊に関与したこと、召喚されてから起きた出来事を話した。

「うーん……難しい問題ね。立香君に違和感あると思つたらそれみたいね」

「今はこうして落ち着いて話していられます、あの2人……特にあちらの私を見かけたら、溢れる憎悪が抑えられなくなるのです」

「まるで復讐者ね、それアベンジヤ」

「まるで、ではないのでしよう。靈基が変質して來ていることは、自分が1番よく分かつてるわ」

煮え滾るほどの憎悪。カルデアにも何人か復讐者はいたが、これほどのものを抱えて

いたのだろう。復讐者の憎悪は、その対象を消しても決して晴れることはない。それがよく分かる感情だった。

「こうやつて葛藤してるくせに、私は立香が一緒にいてくれることを嬉しく思うのです。既に破綻してるのよ」

「いや、それは私が同じ立場に立つたとしても、一緒にいて来てくれる立香君のことは嬉しく思うかなあ？なんせ根っからの無法者ですから！まあ、復讐つて理由では戦わなければね！」

「それは復讐しようとしている、本人を目の前にして言うことかしら？なんにせよ、次に会つたら最後、殺すか殺されるかの戦いになるでしょう。生かすなんて選択肢はハナからありません」

「それで納得できるかは貴方次第よ、アナスタシアちゃん。どちらの選択を選ぶかで、きっと結末は大きく変わる。貴方が納得できる最後を選びなさい」

そう言つて、お節介なお侍さんは部屋から出て行つた。今の私にここまで言うなんて貴方くらいよ。

——どちらかを選ぶ……か。私は結局、どうしたいのかしら。

夢を見た。銃で殺され、バラバラにされ、魔眼を通じて、兵士達に恨みを抱いた少女。ヴァイイ
アナスター

視界が暗転する

次に映つたのは、一面が炎で包まれた街。これから一緒に歩んでいく、マスターとの初めての出会い。これまでの特異点での旅路。色々なサーヴァントや、支えてくれたスタッフとの触れ合いはとても心が暖かくなるものだつた。

再び、見界が音云た。

な者達を奪つたの？

ああ……私の中にドス黒い感情が湧き上がる。自分が殺された時以上の闇に支配されれる。悲しみ、憎悪、殺意。溢れるのが止まらない。

私の心が、靈基が変質していくのが分かる。もう誰も手を取らないで。こんな醜い私を見ないで。

立香が追いかけて来てしまった。私の大切なマスター。もういいの。私は失いたくない。こんな、私といては駄目。

それでも立香は手を取ってくれた。私のことを好きだと言つてくれた。差し伸べられた希望に縋り付く。それで立香が壊れていくと知りながら。

とても嬉しい。それと同時に悲しい。

ああ、どうか私のことを止めないで――。

意識はそこで途絶えた。

瞼を開けると、目の前にはアナスタシアの顔があつた。優しい微笑みでこちらを見ている。頭には柔らかい感触があり、どうやら膝枕をしてくれているようだ。更に頭を撫でてくれているけど、流石に恥ずかしくなり、自身の顔が赤くなるのが分かつた。

「何してるのさ……」

「あら？ 恋人同士つてこういうことをするものでしよう？ 寝顔を見れだし、私は満足よ

？」

「いやあ、まあ、うん。確かにこういうことはするかもね？」

「それはそれとして、魘されていた様だけど、何か悪い夢でも見てたの？」

「……本当は何を見てたかは、ナースチャが1番よく分かつてんだよね？ ナースチャの夢を見てたよ」

「マスターはサーヴァントのことを夢を介して見るとは聞いていたのだけれど、何もこのタイミングじやなくともいいとは思つたのですけれど」

「それは俺に言われてもなんともできません！ ……何度も言うけど、俺はナースチャの味方だから。ナースチャが、どんな道を行こうともついてくよ」

「ええ、分かつてるわ。私もどんなことがあつても、貴方は守りきつてみせます」

『はいはーい。お一人さんに連絡だよ。もうすぐ首都近辺にシャドウボーダーが近づける限界だ。心身ともに準備しといでね。…………あと、無茶だけはしないでね。それは私達も望んでいないからさ！』

ダヴィンチちゃんが、アナウンスと共に心配をしてくれた。俺とナースチャが、どうなるかは分からぬ。きっと、その時になるまで。

「さあ、マスター行きましょう」

「ああ、この異聞帯での最後の闘いだ」

33 私は私を許さない：迷

壊れた歯車は支え合う。

動き続けるか、崩壊するか。

——それは最後になるまで誰にも分からぬ。